

〈研究ノート〉

論文本論における「配列」と「構成」に関する一考察

—— 山田ズーニーの論拠の配列順をめぐって ——

高 松 正 毅

A Brief Thought on Patterns of Essay Organization

Takamatsu Masaki

本稿では、山田ズーニー著『伝わる・揺さぶる！文章を書く』に見える「論拠の配列順」に、分かりやすさの観点から検討訂正を加える。

続いて、論文における本論内の結論の位置について考察する。論文に限らず文章は、意識せずに書くと、どうしても後ろが重たくなってしまう。したがって論文の本論内では、できるだけ早く結論を示す方が良いことを述べる。

さらに、論文本論の形式・構成あるいは結論へと至る段取りや道筋は、結論があらかじめ決まっている場合に限り、決めることができることを述べる。

1. はじめに

『伝わる・揺さぶる！文章を書く¹』（以下、『伝わる』と略記）は極めて優れた書であり、筆者は大学の教科書としても用いている。『伝わる』が優れているのは、「問い²」の立て方を具体的に示した点にある。

ところが、この『伝わる』の中に、筆者にはどうしても納得できない記述がある。授業では、当然その部分を訂正して用いている。

それは以下の部分である。

論拠は、次のように配列すると良い。(p.103、便宜上、原文にはない番号を付した。)

1 山田ズーニー (2001)『伝わる・揺さぶる！文章を書く』PHP研究所 (PHP新書180)

2 「問い」の重要性を述べる書は、刈谷剛彦 (1996)『知的複眼思考法』講談社、戸田山和久 (2002)『論文の教室 レポートから卒論まで』日本放送出版協会、宅間紘一 (2003)『新版 はじめての論文作成術』日中出版など、いくつか存在する。

- ①・優先順位の低いもの→高いもの
- ②・具体的な根拠→抽象度の高いもの
- ③・時間的配列（問題の背景→現在→将来）
- ④・ミクロからマクロ（個人の実感→社会問題→社会構造へ）
- ⑤・賛否（賛成、反対の代表的意見の提示→両者の共通・差異点、→そこから見える問題点）

筆者の勉強不足かもしれないが、論拠に限定し、このような配列順を見たのはこれが初めてであった。上記は、詳しい説明がないまま列挙されているため、詳細は不明である。筆者の考えでは、上記のうち問題にならないのは②と⑤だけで、残りの①③④は不適切である。

②は、「明確なことから先に書く」という原則に合致するものである。通常、述べて良いのは明らかなことであり、明確でないことについては極力言及しない方が良い。伝聞や憶測でものを語るのは生産的ではないことが多いからだ。明確でないことをどうしても述べなければならない場合は、はっきりそう分かるように「仄聞するところによると」や「これは憶測に過ぎないが」のように書くことになるだろう。

もっとも、②の述べる場所は具体と抽象であるから明確・不明確とは異なる。

抽象するとは、特殊な個別的事例から離れることであるから、指示範囲はひろがりばやけてしまう。すなわち、抽象度を上げることは異なる要素の混入を許すことにもなる。ところが問題とする当該事例は特殊な一例であり、一般論は通用しないかもしれない。したがって、抽象度の高い論拠は弱くなる。②の言わんとするところは、「より明確かつ強固な根拠から述べる」ことと同義だと考えられる。このことに筆者は異論はない。

2. 『伝わる』の内容概観

続く3以下で、①から順に検討訂正を加えて行くことにしたい。検討は論文を書く立場、および分かりやすさの観点から行う。

もっとも、『伝わる』は論文の書き方に特化した書ではなく、「機能する文章」の書き方を述べたものである。「機能する文章」とは、良く働き望む結果を出す文章であり、実用文と文芸文の中間に位置するものであるという (pp.31-2)。 (() 内は『伝わる』の頁数、以下同じ。)

議論の都合上、ここで『伝わる』の内容を通観しておきたい。

『伝わる』では、「1. 意見、2. 望む結果、3. 論点、4. 読み手、5. 自分の立場、6. 論拠、7. 根本思想」を、「文章の7つの要件」とする (pp.33-5)。このうち「意見」「論点」「論拠」の三つを、基本となる3要素としている (p.36)。

「意見」とは、言いたいことであり、自分が考えてきた「問い」に対して、自分が出した「答え」である (p.41)。「論点」とは、文章全体を貫く「問い」である。書き手の問題意識から生じる。

「独自の切り口」であり、どのような問題をどのような角度から扱っているかを指す（p.64）。「論拠」とは、意見を支える具体的な事実である。説得力は、この「論拠」から生まれる（p.35、92、112）という。したがって、山田の言う「論拠」が、論文の論拠と著しく異なるとは考えにくい。

文章の最も基本的な構成（アウトライン）は、「論点」→「論拠」→「意見」の形であるとする（p.117）。これは論文の、「問題提起」→「理由・根拠」→「主張・結論」と同じである。冒頭に掲げたのは、この真ん中の「論拠」の配列順である。

さらに文章を書く際には、「論点」から考えても、「意見」から考えてもかまわないとし、この中間の方法、書いているうちに次第に「意見」がはっきりし、そのことにより「論点」が絞られて行くというように、「意見」と「論点」とを互いに調整しながら書き進めても良い（pp.70-1）としている。これは、筆者の指導法と一致する。

実際の文章では、「論点」は省略されてしまうことが多い（p.37、p.68）とも述べている。ある問題について書くこと自体が問題意識の現れであるし、内容によってはあらかじめ問題提起をするには及ばない場合も多いからだろう。結果として、「論拠」「意見」、または「意見」「論拠」の組みで述べるのが、文章の最もシンプルな構成となる。

この場合の順番は、「論拠→意見」の順（「pだからq」）でも良いし、「意見→論拠」の順（「qなぜならp」）でも良い。

ちなみにこの説明は、樺島忠夫があげたもの³と合致する。樺島があげているのは、事実を先に述べ、意見を後に述べる「事実→意見」の順である。この「事実→意見」も、先に「意見」を述べた後で、「たとえば」等で具体例を導く「意見→事実」の逆の順も可能である。

どちらの順でも書けるが、「事実→意見」「論拠→意見」が、より自然な順番だとは言えそうである。論全体の運びの都合上、あるいは何らかの効果を狙って逆順となる。いかなる要因によってこの順序が決まるかについては、今後さらに検討を加えて行きたい。

3 『伝わる』の「論拠の配列順」の検討訂正

3.1 「優先順位の低いもの→高いもの」ではなく、「重要なものから」先に書く

①は、「優先順位の低いもの→高いもの」とする。p.181では、さらに「論文などなら、優先順位の低いものから高いものへと論拠を配列し、終わりの方にインパクトをもたせてもいい」とはっきりと述べている。しかし、これは完全に逆である。

もちろん程度の問題はあろう。瑣末な論拠をあらかじめ簡単に一瞥してから、決定的な論拠を述べることならあり得るかもしれない。しかし、原則としては、結論と最も結びつきの強い論拠から先に並べるべきである。

最も良いところを後ろの方に持ってくるのは、物語の語り方である。演劇でも映画でも、結末を

3 樺島忠夫（1980）『文章構成法』講談社（講談社現代新書587）pp.124-5.

先に言われたら、これから見る者は腹を立てるだろう。ワクワクする楽しみが半減してしまうからである。

それに対し、論文における論拠は「重要なものから」「より決定的なものから」先に述べるのが原則である。そうしないと上記の②とも抵触してしまう。

一般に論文では、最後の方に重要なものを配置し、物語のように盛り立てようとしてはならない。論文においては、読み手をじらす必要などなく、サスペンスも不要である。そして、些末なことは場合によっては隠す方が良い。したがって大事なものは、何が重要な論拠かを見分けられることになる。

3.2 「問題の背景→現在→将来」ではなく、「現状→背景（経緯）→未来（より近いものごとから）」順に書く

③は、「問題の背景→現在→将来」と時系列にそった書き方を勧めている。しかし、これは、「現状→背景（経緯）→未来」と書く方が良い。現状が、一番近く最もはっきりしている。次が確定した過去である。未来は定まっていない。②の原則は、ここでも生きる。

そもそも、その文章をどうして書くのかといえば、現状に問題があるからであり、出発点は現状である。問題提起が時に省略される理由もここにある。過去からの経緯や周辺事情、事柄の背景等は、現状に関係するものを、必要な分だけ必要な時に付け足せば良い。

事の起こりから全てを丁寧に書き尽くそうとしまうと、あまりに迂遠で、読み手は本論にたどり着く前に疲れてしまい、途中で投げ出されてしまいかねない。

もちろん時系列でしか書けないこともある。時系列で書かれなければならないのは、出来事、物事の仕組みやからくりなどである。これらの場合には、確かにきちんと順を追って述べないと混乱のもととなる。論文でも、部分的には生起時間順に事柄を並べなければならないことがある。

しかし、物事の起こりから順を追って述べて行くことがいつでも最適とは限らない。映画を思い浮かべてもらうとよく分かると思うが、過去の出来事が「回想シーン」として適宜挿入されて描かれる。

全ての事象を「時系列に並べなければならない」と固定的に決め付けてしまうと、一貫していわゆる「編年体」でしか叙述ができなくなってしまい、身動きがとれなくなってしまふ。時の流れとともに話が進んで行く物語でさえ、全ての事柄が時系列で語られるわけではない。論文の論拠も、必要なことを必要なときに付け足す方が、分かりやすくなることが多い。

3.3 「ミクロからマクロ」ではなく、「全体→部分」、「大状況→小状況」の順で書く

④は、「ミクロからマクロ」とする。これも逆である。「全体→部分」、「大状況→小状況」の順で書く。全体像をできるだけ早く述べるのが原則である。細部を積み重ねて全体にしようとする、いつまでたっても要領を得ないからである。そして、このことは4で述べる結論を早く述べることとつながる。

本多勝一も「(3) 大状況ほど前へ ③大状況から小状況へ、重大なものから重大でないものへ⁴。」

4 本多勝一 (1996)『本多勝一集19 日本語の作文技術』pp.52-5.

としている。ただし、本多の説は修飾語の配列順であり、論拠の配列順ではない。しかし、筆者はこの本多の説を一般化できると考えている。

もちろん（ ）内の「個人の実感→社会問題→社会構造へ」とあるのは説得力を持っているように見えるかもしれない。つながりや展開はスムーズとは言えない⁵が、「私にとって大学受験は大問題である。→受験戦争や受験地獄といわれる状態が生み出されている。→日本は学歴社会である。」のように書くことは可能だからだ。

しかし、これを逆にして、「社会構造→社会問題→個人の実感」の順、たとえば「日本は学歴社会である。→受験戦争や受験地獄といわれる状態が生み出されている。→私にとって大学受験は大問題である。」と書いても問題はない。すなわち、社会構造がこうなっていると述べ、現在の社会問題を述べ、個人の実感で終える述べ方は少しもおかしなものではない。

もちろん、これら二つの文章が与える印象やニュアンスは異なる。「順序のレトリック⁶」が働くからである。

「順序のレトリック」とは、たとえば「彼女は美人だが性格が悪い。」という文と「彼女は性格が悪いが美人だ。」という文では、意味内容は似ていても印象は180度異なることを言う。文・文章では、どうしても後ろに置かれた方に重点がきてしまう。すなわち、言いたいことが何かによって文章の構成が選ばれることになる。

ちなみに、この後ろに重点がくることは「～ではなく、～である。」や、「もちろん～であろう。しかし、～である。」「たしかに～に違いない。しかし、～である。」「なるほど～かもしれない。しかし、～である。」などの構文でも同じである。

③と④は、あるいは自然な発想順を記したものかもしれない。自然な思考の流れは、確かに存在するであろう。しかし、我々が実際に考える際には、「ああでもない、こうでもない」と思考は行きつ戻りつするのが普通である。したがって、思いつくままに書き並べたのでは、文章は分かりにくいものになってしまう。書くことは、強く意識して思考を整理整頓することでなければならない。

文章の書き方にパラグラフライティングがある。これは、一つのパラグラフに一つのトピックセンテンスを書く書き方で、通常トピックセンテンスはパラグラフの冒頭に置かれる。このパラグラフライティングの書き方は、分かりやすさのために編み出された手法である。そして、「トピックセンテンスをパラグラフの冒頭に置く」ことは、決して自然な発想ではない。かなり意識的に行わないとできないことだ。

3.4 「賛否」はただ並列に列挙するのではなく、自分の意見との関連性の中で用いる

⑤のように、賛成と反対の意見とを同列に比べ、両者の共通・差異点をあげ、そこから見える問

5 一個人の実感をもって社会状況を語るのではサンプルが少なすぎる。

6 香西秀信（1995）『反論の技術』明治図書出版 pp.46-51.

題点を引き出すことがないわけではない。しかし論文において、この書き方は先行研究の紹介に徹する場合に限られるだろう。すなわち、サーベイやリサーチ、純粋な報告等、他人の意見を自分の外にあるものとして客観的に描く場合である。その場合に限れば、配列順は⑤のようになるだろう。その点では⑤に異論はない。

しかし論文では、他人の意見は自分の意見に引きつけ関係性の中で用いるのが普通だ。自分の意見をはっきりと示した上で、自分の意見に「類（賛成）するもの」と「対（反対）するもの」を引用して利用する。「類するもの」には、自説を強力に援護してもらう。「対するもの」は、着実に論破することにより、自説がより強固なものとなるように書く。

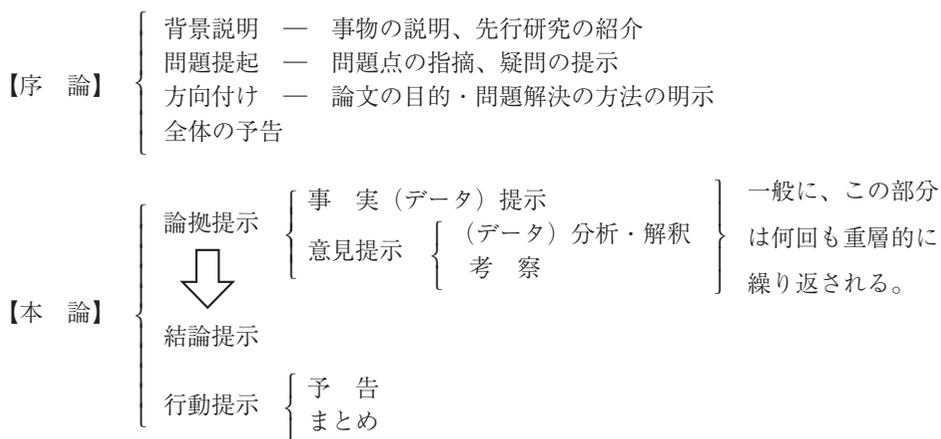
ただし、これは書き方や書く姿勢の問題であり、並べる順序の話ではない。

4 結論を早く述べよ

以上、検討してきたのは「論拠の配列順」であった。ここで関連して論文「本論」での結論の位置について考察を加えたい。

論文の文章について言えることは、必要なことを必要なときに必要なだけ（過不足なく）述べることであり、論文の構成について言えることは、三部構成もしくは四部構成となることだけである。五部や六部の場合もあるが、三部か四部が最も安定することは、すでに拙稿で指摘しておいた⁷。三部なら、「序論・本論・結論」もしくは「序・破・急」が当てられることが多く、四部なら「起・承・転・結」が当てられることが多い。国語教育では、「はじめ・なか・まとめ・むすび」（「なか」は複数あることがある）が用いられている。

下に示すのは、筆者が講義等で使用している「論文の内容構成モデル」である。下記は、浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版をもとに筆者が作成した。



7 高松正毅（2004）『「起承転結」小考』『高崎経済大学論集』第46巻第4号 pp.118-9.

【結 び】 { 全体のみとめ 一目的・方法の要約、論拠の要約 結論の要約・再確認
評 価
展望提示

結論は、本論の中で述べられ、一般に言われる「序論・本論・結論」ではないことに注意されたい。論文本論の最大の役割は論証である。したがって、論文の本論では、論証が着実に行われなければならない。論証に必要な不可欠なのが論拠である。そして、論文本論の構成展開には法則のようなものではなく、書かれる内容に応じ完全に自由な現れ方をする⁸。

筆者が授業で学生に強く注意を喚起するのは、「Claim（主張）（または Conclusion（結論））と Climax（最高潮・結末）を混同するな」である。というのは、学生の中に結論と結末を混同している者が多いからである。

上述したように物語や映画などの結末を先に言われたら面白みは半減する。ところが、そのことから影響されるのか、論文の結論も最後の最後まで言うてはならないと決めてかかっている者がいる。

たしかに自然な発想順では、結論は最後になる。論理展開が長くなれば、「こうなって、こうなって、こうなって、……、」と続けた最後の最後に、結論が「こうなる」と現れる。これは数式の答えが最終行になるのと同じである。

だからといって「結論は最後に述べなければならない」と決めつける必要はない。結論は、先延ばしにされればされるほど、分かりにくくなるからだ。たとえば、人を引き連れてどこかへ案内するとする。その際、「そこを右に曲がれ」、「次は左に曲がれ」と次々に指示を出し、目的地についてからやっと「ここが目的地だ」と述べるのと、「今から行くところはどこそこだ」とあらかじめ目的地を述べてから次々に指示を出すのでは、受け手の印象はまるで異なる。あらかじめ目的地を言われる方が、受け手は安心してついて行ける。論文の冒頭にアブストラクトをつける理由もここにある。

「順序のレトリック」でも述べたが、文章は放っておくと自然と後ろが重たくなってしまふ。だから、重要なことを可能な限り先に述べるように工夫して書くことで分かりやすくすべきである。

結論をできるだけ早く述べることと、必要なことは結論に先立って述べなければならないこととのせめぎ合いを、いかに超克できるかが書き手の腕の見せ所である。

鈴木信一は、「話は（文章は）展開することが求められますから、話し手は結論を踏み台にして、新しいこと、発展的なことに、いやでも踏み込んでいかなければならなくなります。よって、話が深まっていく可能性はこちらの（結論をはじめに言うてしまう）ほうが高くなるのです。」としている。

8 展開のしかたに関する研究として筆者が知っているのは、文章ではなく談話の研究で、「勧誘」におけるものである。後述するように「勧誘」という決まったゴールに向かってのものだから、この研究は成り立つ。ザトラウスキー・ボリー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版。

そして、以下のような同じ11行のやりとりの例をあげ、「結論を先延ばしにするタイプでは、予定どおり“Aは老けていて、カッコよくなかった”というメッセージが最後に伝えられて終わっています。／一方、結論をはじめに言うタイプでは、そこから発展して、最後には意外な結論に到達しています。“スター俳優といたって、しょせん人間なのだ”。これは前者の結論に比べたら、多少なりとも深い認識なのではないでしょうか。」と述べている⁹。

【結論を先延ばしにするタイプ】

↓

「ねえ、B子って芸能人に会ったことある？」

「芸能人かあ、お相撲さんになら一度会ったことあるけど……、どうして？」

「昨日会っちゃたの。渋谷で」

「えっ！ 誰に？ 誰に会ったの？」

「誰に会ったと思う？ ヒント。男性俳優」

「えー、わかんない」

「Aよ」

「うっそー。すごい」

「でも、がっかりしちゃった。全然カッコよくないの」

「どうして？ いますごい人気よ」

「意外と老けてたのよ。肌に張りがなくていうか」

【結論をはじめに言うタイプ】

↓

「ねえ、聞いて。Aって全然カッコよくなかった」

「えっ、会ったの？」

「昨日渋谷に買い物に行ったら、たまたまドラマのロケやってたの」

「ほんとに！」

「意外と老けた感じがしてさ、肌なんかもかさかさしてた」

「でも若い子に人気なのよ」

「だから、それなりの加工がされてるってことなんじゃない」

「加工？」

「テレビに出演するときは、男でも化粧するって言うじゃない」

「まあ、全国放送されるんだから、肌が汚くっちゃね……」

9 鈴木信一（2008）『800字を書く力』祥伝社（祥伝社新書102）pp.93-8.

「結局同じ人間なのよ」

「重要なことを先に述べた方が思考は深まりやすい」と、筆者も考えている。筆者の目指すところは、より一般性の高い文章構成上の法則の発見であるが、あるいは書き言葉と話し言葉、長い文章と短い文章など、場合分けが必要かもしれない。今後とも検討を重ねたい。

筆者が改変したものも二例添えておく。元の文章は末尾を参照されたい。筆者の例では、AとBとで意味内容に違いはない。また、この程度の長さの文章であれば、A・B両者の分かりやすさに、違いはさほど感じられないかもしれない。しかし、文章が長くなるようなら、できるだけ早く結論を述べておく方が良い。

A：結論を先に述べる形

スイスのパンはまずい。なぜなら、スイスで食べられるのは、まる一日以上たった貯蔵パンだけで、できたてのパンを食べることはできないからだ。できたてのパンが食べられないのは、作り手がないためである。スイスの若者たちは夜中から起きて働かねばならぬつらいパンづくりを嫌い、パン職人になろうとはしない。

B：結論を後に述べる形

スイスの若者たちは夜中から起きて働かねばならぬつらいパンづくりを嫌い、パンの作り手がない。そのため、スイスでは、できたてのパンを食べることができない。スイスで食べられるパンは、まる一日以上たった貯蔵パンだけである。したがって、スイスのパンはまずい。

上記は、松村明（1976）『国語表現実践ワークブック』（おうふう）第四章第二節主題と題材（p.23）によった。原文は、もともと第一文に結論（トピック・センテンス）を述べているため、極めて分かりやすいものである。

次にあげる文章は、問題を含むものである。

A：結論を先に述べる形

10年前の1970年では本書を出版することは出来なかった。書かれている理論に十分な比較検討を加える時間が足りなかったからである。

ある理論が比較検討され、さらに実際の看護過程に適用されるまでには一定の期間が必要である。発表されたばかりのものを即座に出版するわけにはいかない。

十分な比較検討を加えるのに必要な期間が、この10年であった。

B：結論を後に述べる形

本書には看護理論論文12編を収録している。これらの論文の大半は、今から10年前の1970年頃に発表された。

理論は分析、理解され、研究や実践に適用されるまでに一定の期間を必要とする。発表されたばかりの論文をすぐに出版することはできない。

そのために、本書のかたちで出版できるまでに10年を要した。

上記は、宇佐美寛（1998）『作文の論理』（東信堂）第九章（pp.82-9.）によった。

筆者は上記のように「10年前の1970年では本書を出版することは出来なかった。」「本書のかたちで出版できるまでに10年を要した。」を、トピックセンテンスとしてリライトしてみた。

元の文章の第二段落は、「なぜこの本が生まれえなかったかといえるのだろうか。」と疑問文で始まっている。問題提起で始まる文章と考えれば、この「問い」への「答え」、出版できなかった訳が言いたいことだと考えられる。ところがよく読むと、筆者の言わんとすることは、「（本書に収録した12編の論文の理論は、10年という歳月をかけて分析、理解され、研究や実践に適用されてきたもので、）この書は極めて優れた本である。」なのではないかと思われてくる。もし、この読み取りの方が正しいとすれば、言いたいことが明示されていない文章と言える。

このような言わんとするところが不明確な文章に対し、「自分の言いたいことが十分に整理できていない証拠である¹⁰。」として批判を加える人がいる。しかし、筆者はこの考えには与しない。「書く人のためによく言われる、まず自分の考えを明確にして、それからその考えを明確に述べるようにしなさい、という助言が誤り¹¹」であるとすると理論に、筆者は立脚しているからである。

能力が高く、全てを脳内で操作できる人なら、完璧なアウトラインを完成させてから、それに沿って書いて行くことができるのかもしれない。しかしこれは、書く人の能力、あるいは質（たち）によるものであろう。残念ながら、筆者にはそれができない。

佐藤忠男は、「木下恵介監督は、クライマックスとラスト・シーンを最初にきめておいて書きはじめるそうである。いっぽう黒澤明監督は、ファースト・シーンからいきなり書きはじめ、ラスト・シーンはラストになってみなければどうなるかわからないそうである¹²。」と述べている。筆者は、黒澤明監督タイプである。佐藤自身も「結論は予想できない」とし、「最初からある主張がはっきりと出てくるということは少なく、最初はむしろ、ばくぜんとした疑問が提出されるだけであることが多い¹³。」と述懐している。これは筆者の内省・実感と合致する。

はっきりとしていないだけで、目指すところなり方向性はあるわけだから、書き進めるうちにあらぬ方向へと逸れていってしまうことや、正反対の結論に至るというようなことはあり得ない。し

10 杉原厚吉（2001）『どう書くか——理科系のための論文作法』共立出版 p.60.

11 ハワード・S・ベッカー著、佐野敏行訳『論文の技法』講談社（講談社学術文庫）はじめに p.6.

12 佐藤忠男（1980）『論文をどう書くか』講談社（講談社現代新書576）pp.107-8.

13 前掲中12 pp.106-7.

かし、とにかく書かないことには、考えは一向にはっきりとは浮かび上がってこない。

5 文章の形式・構成を書く前に決めてはならない

おおよその構成、すなわち「アウトライン」を大ざっぱに決めてから書き始め、書き進めながら適宜改変を加えて行くのが、ごく一般的に提示される文章の書き方である。しかし、あらかじめある決まった型や様式、フォーマットを作ってしまう、その中に内容を流し込んで行くのは、論文の書き方ではないと筆者は確信している。このことは、受験小論文においても同じであろう。

ところが樋口裕一は、小論文の指導において結論を先に決めて書く「決め書き」、型どおりに書く「型書き」を一貫して指導している。この方法だと、確かに見た目は整った文章が出来上がる。しかし、自分の頭では考えない中身の無い文章、すなわち、「物まね」や「なぞり」に陥りやすい。筆者は、この指導法が不適切であることの立証を目指している¹⁴。

樋口の指導法は、賛否のどちらかの立場を早々に決め、「問題提起→意見提示→展開→結論」の四部構成で書く方法である。樋口の指導法に対し、森下育彦は否定的な立場を取りつつも、「①筆者の主張をまとめる。②賛成か反対かを述べる。③その理由を説明する。」とする構成案を提示している¹⁵。しかし、書く以前に構成を決めてしまうのでは両者に違いはない。

『賛成』か『反対』で書く」と、書くことを書く以前に決めるから、構成をあらかじめ決めることができる。賛成なら賛成、反対なら反対と、あらかじめ結論やゴールを決めて書こうとするから、形式もあらかじめ決まってしまう。逆も成り立ち、先に構成を決めてしまうと、賛成か反対かなど、決まり切った結論でしか書けなくなる。

筆者は「論文作法Ⅱ」という授業で反論の技術を教えている。そこではテキストの指示に従い、型どおりに書くことを指導している¹⁶。具体的には「私は〇〇氏の意見に反対である。」と第一文で述べ、続いて〇〇氏の主張を「 」で引用し、「〇〇氏のこの意見はおかしい。」として、「第一に」「第二に」「第三に」と反論の根拠を列挙して述べる型である。こんなことが可能なのは、最初から「反論する」ことに決めているからである。

この場合、読み手に何の「第一」なのかを分からせない状態のまま、「第一に」と書き始めることはできない。「第一に」と書いて良いのは、何の第一かが明白な場合に限られる。したがって、「第一に」と述べる以前には、必ず何の「第一」なのかを表す文が書かれなければならない。「私は次の理由で反対である。」「こう考えるのは、以下の理由である。」のようにである。また、「第一に」「第二に」で並置できるのは類似のレベル・内容の事柄に限られ、全く異質の事柄やレベルの異なる事柄を並べることはできない。これらが、形式による縛りである。

14 高松正毅 (2007) 『「論文論」への構想』『平成18年度 高崎経済大学特別研究報告書 大学全入時代におけるスタディ・スキルズ教育に関する基礎的研究』p.68.

15 西研・森下育彦 (1997) 『「考える」ための小論文』筑摩書房 (ちくま新書) pp.106-9.

16 香西秀信 (1995) 『反論の技術』明治図書出版 pp.122-4他。

ちなみに、「次の三つの理由で」「以下の五つの点から」のように数を添える（ナンバリングする）のも、分かりやすさのためには効果的だ。全部でいくつあるかが、読み手にあらかじめ伝わるからである。

行事の案内や依頼文などならテンプレート（雛形）で書いて何ら問題は生じない。あらかじめ形式を決めてしまっているのは、その文章で述べる内容、伝えるべき事柄やその文章の果たすべき機能が、明確に定まっている場合だ。すなわち、伝えるべきことや何を書くかがすでに定まっている場合である。明確なゴールに向けて書く場合に限り、形式を決めて書き進めて行っても良い。

それに対し、いろいろと考えを巡らし、思考を深める文章を書く場合には、前もって形式や構成を決めてしまっているはいけぬ。形式・構成が思考を制限してしまうからである。形式が決まっていると、形式に収まらないことは書けなくなる。すなわち、形式を先に決めてしまうと内容までが制限されてしまう。

形式が内容を制限し、内容が最も適した文章構成を求める以上、形式や構成を前もって決めつけてしまえば絶対にいけない。自由に思考を巡らせるのであれば、文章の形式・構成は自由なものでなければならない。

言わんとするところをより明確にするのは、とにかくいったん書き上げてから推敲で行う。書くべきことが書かれていないことも、書いたからこそ分かる。最初からいきなり整理された考えを書けなくて構わない。支離滅裂な文章でも、臆せずどんどん書くべきである。その考えが支離滅裂であることも、書かない限りは分かりようがない。つまり、支離滅裂な文章を書いてしまうことが問題なのではない。自分で書いた考えが支離滅裂だと判断できないことこそが問題なのである。したがって、自分自身の文章を客観視し、批判的（クリティカル）に読めることの重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。

6 まとめ

論文の本論において、構成や配列順に原則があるとすれば、それはただ一つ、「出し惜しみをしない」ことである。すなわち、事の核心をできるだけ早く述べようとする事だ。そうすることによって分かりやすさが促進される。しかし、現実にはいきなり核心から述べ始めたのでは何が何だか分からない。だから、分かるように伝わるようにするために、必要事項の説明が、核心に先立ってどうしても必要になる。論文では「序論」において、先行研究の紹介や問題提起が行われるのはそのためである。しかしそこでは、必要最低限のことを述べるのであって、長々とやっつけはいけぬ。核心部分以外は、常にできるだけ短く端的に切り上げるべきである。

絶対にしてはいけないことは、事の起りや大元から丁寧に全てを述べ尽くそうとすることだ。重要でないことを長々と述べることは読み手を飽きさせるばかりか、そのことが重要なことであるかのような誤解を読み手に与えることになる。

今後は実例を数多く渉猟し、より確実に文章の構成と配列順について検討を深めて行きたい。

<参考>

「パンの味」

スイスのパンはまずい。車でひと走り、国境を越えてフランス領にはいると、パンの味はがらり一変、うまくなる。それを買いこんで税関を通ると、がちり税金をとられる。隣合せでなぜ味がこうも違うのか。山国育ちのスイス人は質素を旨とし、味にこだわらないんだ、いや、二度の大戦で中立を守った経験から、貯蔵小麦を順次放出して新小麦を食べないからだ、ともいうが、これは“俗説”。

このほど、スイスの観光地ルツェルンで開かれたパン屋の総会で、その簡単な理由がわかった。フランスのパン屋は食卓にのぼる数時間前にパンをつくるが、スイスのパン屋はまる一日たったパンを食わせるのだ。朝食用にできたてのパンを提供するためには、夜中から起きて働かねばならぬ。ところが、外国人労働者の制限が問題になっているように、スイスは極端な労働力不足。つらいパンづくりに若者たちがソッポをむき、つまりは貯蔵パンを食わせることになる次第。

そこで、同じフランス語を話し、フランスのうまいパンを横目で見ているスイスのフランス語地方で、夕方にうまいパンを食べる運動が始まった。朝食がダメなら、せめて夕食は焼きたてのパンを、というわけで、これならパン焼職人も集るだろう、との計算である。

風光明媚（めいび）、高い生活水準——スイスは“理想の国”かも知れないが、高度の経済成長が“味気のない生活”を招くことも確かである。日本からの友人の便りに、近所のうまい豆腐屋が人手不足で閉店してしまった、と嘆いていた。いずこも同じ、か。（ジュネーブ・秋山）

「朝日新聞（朝刊）」1970年6月18日付6面（縮刷版p.608）「特派員メモ」による。

1冊の本は、その本が出版された時代の文化的所産である。また、それぞれの本は、その時代の歴史的課題を背負って生まれるといえよう。1980年代の幕開けの年に出版されたこの本も、その歴史的必然性を担って生まれてきた。すなわち、この本は、1980年のアメリカの看護学が、科学としての発達史の中で、どんな位置づけにあるかを、実によく反映していると思われる。あたり前のことのようにあるが、この本は、10年昔には出版されようがなかったし、今から10年後には、たとえ出版されたとしても、かなり様相が異なっているであろう。

10年前の、すなわち1970年には、なぜこの本が生まれえなかったかといえるのだろうか。第1に、この本には12編の看護理論が収められているが、1970年にはその大半は、発表されたばかりであった。1つの理論が発表された場合、それが十分に分析、理解され、かつ研究や実践に適用されるようになるまでには、一定の期間が必要である。10年前の、多くの看護理論が出版されたばかりのときには、それらの理論を比較検討し、かつ看護過程に適用するというこの本のような試みはなしえ

なかったであろう。

ライト州立大学看護理論検討グループ著、南裕子・野嶋佐由美訳（1982）

『看護理論集』（日本看護協会出版会）「訳者序」冒頭二段落による。

（たかまつ まさき・本学経済学部教授）